

形成し得ない状態にあつたり、數對の覆卵葉が缺けてゐたりした。併し、これらのうち 8 例は次の脱皮に於て完全な覆卵葉を形成した。數百の對照中覆卵葉に異常を示した例は 2 例を見たのみである。

今までに卵巢を除いた雌 60 餘、睪丸を除いた雄 20 程を切片に作つて調べたが、生殖腺組織を認め得たものはなかつた。唯生殖腺を除去したものでは、雌雄をとらず、脂肪組織の著しい増殖が起り、時には體内の殆どあらゆる間隙を埋めてゐた。正常な動物では脂肪組織は極めて僅少にすぎぬ。

今一つ気づいた事は、正常雌では、覆卵葉が形成されると、次の脱皮に又覆卵葉が出来る与否とに拘らず、脱皮間隔が延長され 45 日程となる。覆卵葉の出来ぬ脱皮と次の脱皮との間隔は 30 日餘で、この場合にも次の脱皮で覆卵葉が生ずるか否かはこの間隔に影響を及ぼさない。この差は統計的にも充分意義のあるものである。しかるに卵巢をとつたものでは、覆卵葉形成の有無に關係なく脱皮間隔は常に 30 日餘となり、何等有意義な差を生じなかつた。

以上よりして、ダンゴムシに於ては脊椎動物に於けるが如き生殖腺のホルモンの存在を否定してもよいと思ふ。生殖腺除去は脂肪組織の増殖を起す所を見ても、動物の代謝に對しかなりの影響を及ぼす事は確實であるが、之を生殖腺ホルモン缺損の結果と見る必要はない。生殖腺の如き細胞の増殖乃至成長の盛に起る器官の剔出が代謝に影響を及ぼすは當然であらう。覆卵葉形成能力の輕微な攪亂の如きも、かかる身體的な變動の結果と見る事が出来やう。異常覆卵葉が次の脱皮で正常なものに代る事などもホルモンの缺損を以ては説明し難い。卵巢剔出が脱皮間隔に及ぼす影響は新しい問題を提出するものであるが、未だ研究してない。哺育囊中に存する發生しつつある胚が何等かの効果を及ぼすのでもあらうか。

新 著 紹 介

松下 高・高山謙治共著 鮭 鱒 聚 苑

A 5 判上製函入 本文 750 頁 口繪 13 面 昭和 17 年 8 月 水産社 7 圓 1500 部

何か一つの動物（それは同一種でなくても宜い）を永年研究對象にして居ると其の動物に關する諸方面の資料を漁るやうになり遂には其等を一書に纏めて見たい念願を學者に抱かせる。蛙でも金魚でも蟹でも鰻でも皆然りである。又實業家や技術家が何か一つの動物に多年親しむと矢張り同じ心境になるものと見える。

著者の内松下氏は水産講習所の出身で現在東洋製罐株式會社副社長であり、高山氏は明大出身で渡米したことがあり、歸來食料品店を經營された。松下氏は監修の任に當り資料の蒐集整理並びに執筆は主として高山氏が擔當したとある。前篇「北方の民族と鮭鱒」は鮭鱒發見、鮭鱒の語源、傳説と民族の鮭鱒、藝術の鮭鱒、鮭鱒の貢進、古代鮭漁、蝦夷松前の鮭漁、味覺の鮭鱒の諸章に、後篇「近代文化と鮭鱒」は鮭鱒の性格、乾鮭と燻製鮭、鹽引、北洋漁場、近代鮭鱒産業、黎明期の鮭罐詰、鮭鱒罐詰製造工程、凍鮭、鮭鱒の副産物、榮養の鮭鱒の諸章に分れ附録に「鮭鱒漁業家列傳」「鮭鱒年譜」があり内容は誠に豊富である。9 ポと 8 ポ活字の併用で 750 頁に達して居るから其の蒐集資料の許多にして取捨排列の頗る難事業であつたらうことが推測される。「鮭鱒の性格」の章に「分類に困る鮭鱒」といふ節があつて種類其のものの複雑と之を處理する學者の態度が各人各様なのに著者も惱まされたことであらうと同情申し上げる。本書は鮭鱒に關する百科辭典と云へば判りが早い。斯かる浩瀚の書の上梓を敢てした發行所の意氣を壯とすべきである。誠に「我が北進の重要性は鮭鱒を知悉することに依つて一段と認識を深められる」のである。（高島春雄）